「東日本大震災」災害支援だより

第6号(新春特別号) 2012 年1月 31 日発行

全国移動ネット災害支援の会　〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1－1－2　山崎ビル 204 号

◆問合せ先◆
全国移動ネット
TEL03-3706-0626
E-Mail
info@zenkoku-ido.net

巻 頭 言

災害支援の会プロジェクト　代表・柿久保浩次

震災から 10 カ月、避難している人たちは仮設住宅等で新しい年を迎えている。

被災範囲が大きく広すぎて、復旧、復興の言葉が具体的なものとして見えてこないが、被災された方々は毎日の生活の問題に追われながらも、もとの生活を取り戻すように動き始めている方々もいる。仮設住宅での生活移動の相談や、被災地での新しい移動支援グループの立ち上げなど、ずうーっと忘れない、ずうーっと続けていく災害支援活動でありたいと思います。

●活動報告

1. 概要報告(2011 年9月～12 月)

●「震災から 10 カ月、今できることを」(災害支援の会事務局)

７月末に全国移動ネット災害支援の会の打合せ、(通称) だらだら会議 (第 2 回) が開催され、石巻の移送レラやたすけっとの亘理の拠点を支援することや、被災者が仮設住宅に移り、そこで発生する問題の認識や、被災地で生活する方々自身の力で移動の問題を解決していく支援をどうするのかなど、活動の方向が論されました。９～11 月まで、多くの方々が支援のため主に仙台や石巻の被災地を訪れてくれましたし、９～10 月には石巻や亘理で運転協力者の認定講習会も開催され、11 月には移動ネットみやぎの主催で被災支援についてのシンポジウムが開催されました。

12 月には、岐阜市民協や、横浜移動サービス協議会から、仙台のたすけっとの協力を得て、中古の福祉車両を被災地へ贈呈することができました。ただ、12 月以降、石巻の移送レラへの運転ボランティア活動の支援などが低調となっています。

2. 石巻の移送レラの活動協力

●寄稿「『移動支援ボランティア　石巻レラ』での活動報告……2011. 9.14－18」

(移動ネットおかやま・備前市社会福祉協議会／中村守勝)

1. 被災地に行くまで

仕事の都合がつかなくて、なかなか被災地支援に行くことができなかったのですが、５月に石巻市のレラへ移動支援に行って来られた移動ネットおかやまの理事長・横山さんから「３日間でもいいから石巻に行って欲しい」と背中を押されて、仲間の職員と３人で 9 月 14 日～18 日の予定で石巻へ行くことにしました。「移動ネットみやぎ」の菅原さんが、宮城県が発行する (高速道路が無料になる)「災害派遣等従事車両証明書」を申請し、当方に郵送してくださいました。

全国移動ネットが宿泊拠点としている仙台市泉区のミキ自工の今野社長が支援物資の届かないところに物資を届けておられることから、友人が作った有機米と乾麺を持参することに。レラには「野菜ジュースを差し入れに」と考え、職場の人からは子どもさんの服 (若い男性用) をいただきました。

移動ネットおかやまの高山さんと樫原さんからも食料や冬物衣料の支援物資を購入したり用意していただき、ミキ自工に直接送っていただきました。

石巻では、全国移動ネットの杉本さんが借りておられる宿泊拠点を使わせていただくことになりました。

２．出発（自家用車で岡山から石巻へ）

私の車で、午前８時に赤穂 IC から仙台へ向かいました。

名神で少し渋滞がありましたが、北陸自動車道はスムーズに通行ができて、磐越自動車道で新潟から郡山に抜けて東北自動車道から仙台東 IC に午後８時頃に到着。近くのビジネスホテルに宿泊しました。

３．活動１日目

15 日、仙台を午前６時半に出発して、７時半にレラに到着。注意事項とガイダンスを受け、本日の予定表をもらって、３人それぞれがペアになる人を紹介されました。

１日６回の乗務はすべて、病院または市役所から仮設または避難所への片道の送迎でした。この日のボランティアは 13 人で、車両は６台。

レラ立ち上げから半年間、休みなしで切り盛りされている村島さん（札幌の方）から「明日は予定が多い」とお聞きし、この日は石巻の宿泊拠点に泊まることにしました。

４．活動２日目

16 日、この日の予定は 38 件、うち往復が 20 件ありました。つまりトリップと考えると 58 件、これに当日予約を足すと、80 件くらいをこなすことになります。

この日のメインは、仮設から日赤までストレッチャーで送迎という方でしたが、リフト車やストレッチャーの経験者は私しかいませんでした。実際にその方の仮設の部屋に行ってみると、とても起き上がれそうにないので、タオルケットを身体の下に敷いて、担架のように持ち上げて、裏のサッシのほうから出てストレッチャーに乗っていただき、仮設と仮設の間は砂利道なので車両までストレッチャーを持ち上げて移動しました。

「入院になるかも知れない」と思いながら日赤まで送りましたが、レラに帰って報告すると、「日赤はめったに入院させてもらえない。骨折して骨が見えていても帰らされる」とのこと。石巻市立病院は被災して全壊、その他の医療機関も医師やスタッフが亡くなったりで、日赤に集中している。そのために緊急でないと受け入れられないようでした。結局夕方にその方を迎えに行くと、点滴を打ってもらって少し元気になっていましたが、ストレッチャーの送迎は必要な状態でした。

昼食はレラで用意してくださったソーメンとお握りでした。その後休む間もなく、病院から仮設または避難所の送迎を繰り返し、午後６時半終了となりました。

５．活動３日目

17 日、予定では透析の病院と日赤にそれぞれ患者さんの往復の送迎があるだけでしたが、土曜日だからか買い物等の依頼で次々に当日予約が入ってきました。

最初は山奥の家から透析病院に行く方で、震災直後は仙台まで透析に通われていて、「石巻市内の透析の病院が再開してくれたので助かった」とおっしゃっていました。

障がい者用の仮設住宅の方から、「携帯電話の使い方がわからないので、販売店へ連れて行ってほしい」という依頼がありました。行ってみると身体障がいの方の棟にはスロープがあり、管理事務所に行く途中には食堂か集会所のような建物がありました。どのような運営形態なのかわかりませんが、さまざまな障害を持っている方が入居されているようでした。

拠点に帰って軽食をとると、また次の送迎。買い物に行った方が「大きい荷物がある」とのこと、別の便で行った人が同乗して同じ仮設住宅に送り、次の人は避難所から知り合いの家に行き、再びその家まで迎えに行って、そのまま駅まで送り…という状況。「何をしに、どこに行くか」聞かないで、言われるままの送迎でしたが、理由を問えるとき・問えないとき、問える人・問えない人があると感じました。

こうして１日が終わり、午後７時頃に石巻レラを出発。仙台のミキ自工に到着したのは夜８時頃でした。支援物資を下ろしてから部屋に案内していただいて、事務所で缶ビールをご馳走になりました。

ビールを飲みながら、今野さんのミキ自工の被害の話や支援物資や支援金募金、寄せ書き等々をお聞きしまし

たが、お客さんが女川町や石巻市、松島町等の沿岸部に多くあって、その方々が甚大な被害を受けたために、仕事が半減しているとのこと。津波による直接の被害を受けていなくても、経済的な被害はとても広範囲に及んでいると感じました。

その後、シャワーを使わせていただき、就眠。翌日は12時間ぐらいで、無事に岡山へ帰ることができました。

６．支援を終えて【感想】

１．石巻レラでは利用者さんから、「いつまで送迎してもらえるのか」と聞かれるようになったそうです。レラの村島さんたちが半年も休みなしで、それに応えていることを考えると「いつまでこの人たちがもつのだろうか」と思いました。ボランティアは、ご飯を食べても風呂に入るにもお金が要る。車両も持ち込みの車両や借りている車両がほとんどですから、支援は引き際と引き方が難しいと思いました。

２．３日目に携帯電話の件で迎えに行った障がい者用の仮設住宅は、どのように運営しているのかわかりませんが、施設の利用者のことは施設でできないといけないのでは？　たとえ仮設であっても施設は自立支援法の中で運営がなされているのではないか？　また、一方で職を失った人々がいるわけですから、人も雇っていけるのでは？　という想いをもちました。

３．被災地といっても一様ではなく、被災者といっても一様ではありません。さまざまな被害の状況があり、それぞれ立ち直る時期も違ってくるでしょう。避難所から仮設住宅に移行してもそれで事足りるということではないし、暮らしも違う。仮設住宅に移ると孤独になって、自殺する人、精神がまいってしまう人も出てきます。当然、精神的なケアが必要ですが、移動支援は精神的なケアも含めてあるものだと思います。

通院だけでなく、買い物をすること。人に会うこと。ご飯を食べに行くこと。お風呂に入りに行くこと。これらは、日常生活を送るうえで大切な欠かせないことですから、瓦礫の処理がついたからとか、避難所が解散したからとかで終了できるものではありません。移動支援は、暮らしを支える支援なので、居場所が変わっても、人の暮らし方が変わっても必要とされるものだし、それゆえにやめることが難しい支援であり、ボランティアという曖昧な形態ではなく、永続できるような仕組みが必要で、そこの住民が自らその必要性を感じて、行政や社協と一緒になって、仕組みづくりを主体的に行わねばなりません。

大きな被害を受けた被災地ではダメージが大きすぎて早急には難しいですが、仕組みづくりに向けての支援が必要になっているのではないかと思いました。

４．災害が多い国でありながら、国としての災害対策の中に金銭的な積み立てがないことに、改めて不安を覚えました。補正予算を組まなくては何の手も打てないなどありえないし、権力の中枢にいる人々があまりにも鈍感すぎます。そして、そのような人々を選び続けている私たちも鈍感すぎたと痛感しています。

５．報道は、当初からセンセーショナルなものばかりが全国放送されて偏りがあるように思いますが、受け取る私たちも「報道されることがすべて」と錯覚して、報道されていないところに思いを馳せることができていないように思いました。

６．被災地ボランティアの募集について、当初から個人のボランティアを受け付けていないように思いました。

それは、「事故が起きたら誰が責任を負うのか」を常に念頭にして判断（仕事）していることに起因するからで、移動サービスもそこを問われることが多いです。

ボランティアには「食料も寝るところもすべて自己責任でお願いします」と自己責任、自己完結を求めながら、自分たちが行うことについては「ボランティアの受付」でさえも自己責任を回避するような判断をしてしまう。そうした空気が流れているような気がしました。

７．震災から半年が過ぎて復興に向けて自立していくための手立てを考えて、できるところから、自ら実行に移して行かなければならないときに来ているような気がしました。

介護保険も障害者自立支援法も自立を支援するということですが、この国では「自立とは何か」を議論したことがありません。自立とは何かわからないままに自立支援という言葉だけで、「自分たちのしていることが自立支援である」という結論になっています。被災者の自立について、被災地の自立についても、いろいろな立場の人たちと議論をする必要があります。

最後に。

「生命は、常に未来に向かう」　　（2011.10. 4）

＊スペースの関係で中村さんの原文を編集、割愛させていただいたことをお詫び申し上げます。（事務局編集担当）